

楼蘭の文学

——漢詩に詠出された「楼蘭」についての一考察——

山田勝久

第一章 はじめに

往古、タクラマカン砂漠のロプ・ノールの西岸に、楼蘭王国という小さな国があった。この地域から出土したミイラの調査によって、紀元前二千年頃には、コーカソイド系の人々が住み着いていたことが判明している。だが、歴史文書に残る楼蘭の最古の記録は、それよりもずっと新しく、紀元前一七六年に匈奴王の冒頓单于が、前漢の孝文帝に送った手紙である。『史記』匈奴列伝^②には、「わが軍の吏卒はすぐれ、馬は強く、とうとう月氏を滅ぼし、悉く斬殺してこれを降下させた。そして楼蘭、烏孫^③、呼揭^④や、その傍らの二六国を平定し、すべて匈奴に服従させた」とある。「二六国」は「三六国」の誤記と思われるが、いずれにしろ匈奴は中央アジアの大部分を配下に置いたことになり、以来、楼蘭王国は匈奴と漢の双方の谷間にあつて、数奇な運命を辿ることになる。

私が楼蘭を踏査したのは二〇〇三年、二〇〇四年、二〇〇六年の三回である。トルファンから南下し龍城を経て足を踏み入れた時も、敦煌の玉門関から西行してロプ・ノールの北岸から入場した時も、また、陽関から米蘭^{ミイラン}を経由して北上した時も、楼蘭は歴史の残照に輝き、美の光芒を今に伝えていた。

二〇〇三年二月三日、ウルムチ市登山協会（趙子允会長）のロブ・ノール探検隊は、イギリス人探検家オーレル・スタインが名付けた「LA」（楼蘭故城 地点の北東、土垠遺址の高さ一五メートル、長さ五〇メートル余の半島状の台地の穴から、美しい壁画と彩棺を発見した。二月一日付の朝刊紙「晨报」^{しんほう}は、この発見を大きく報道し、中国国営・新華社通信は三月二日、「世紀の発見」と題して、全世界に楼蘭の地下墓室発見のニュースを発信した。一九〇〇年三月二八日、スウェーデンの探検家、スウェン・ヘイインの案内人の艾爾得克^{あゐるとく}が「LA」を発見してより一〇三年、その間、一片の壁画も発見されていなかったもので、このニュースは史上初のことであった。私は当日、朝七時半のNHKのニュースで初めてこの内容を知り、すぐに旅装を整え楼蘭に向かい、日本人として最初に地下墓の壁画を調査することができた。帰国後の四月二〇日付の読売新聞夕刊の文化欄に「大量の原色壁画発見」と題して、二枚の墓室内の写真を入れて発表し、壁画の位置も、北緯四〇度三九分、東経九〇度七分、海拔七二メートルであると公表した。

壁画の内容は、イラン風の髯を生やし、グラスを持ったソグド商人の酒宴図や、仏教で用いる法輪のような円形の文様、そして、楼蘭の住民の放牧図であった。遠い過去からの熱いメッセージを伝える美しい壁画、そこに描かれた六名の人物像の故郷ウズベキスタンに向かったのは、同年八月のことであった。ソグディアナで楼蘭の墓陵と類似した壁画を見ることができ、今後の研究に大いにプラスになった。

本稿は考古学的な調査報告や、歴史的な研究ではない。タクラマカン砂漠に眠る文明の宝庫、永い歴史と謎とロマンを秘めた楼蘭王国に対して、中国の古代王朝の詩人たちは、どのような感懐を抱いて詠いあげたのかを、作品を引用して紹介、考察を加えることを目的とする。

第二章 漢代の西域の詩歌

西域の風物が詩として詠まれた最古の作品は、天山山脈における西王母と周の穆王の「瑤池对歌」である。ここでは、『芸文類聚』や『穆天使伝』等に収録されている崑崙山脈の風光を詠んだ「白雲謡」を紹介しよう。

白雲在天、丘陵自出、道里悠遠、山川間之。
 (『古詩源』卷一)

ところでシルクロードには四本の道、いわゆる草原の道(ステップ路)と砂漠の道(オアシス路)と海の道(南海路)、そして山河の道(西南シルクロード)があった。砂漠の道は前漢の武帝(劉徹)の時代に開通したが、山河の道はそれよりもずっと早く、殷・周の時代から貿易ルートとして使われ、それが春秋・戦国時代にも使用されたと考えられる。すなわち、崑崙山脈の北麓のオアシス和田(古代・于闐国)の玉は、西南シルクロードを東伝して楚国に伝わったのである。

『韓非子』の和氏篇によれば、春秋時代に、楚国の卞和が山中で得た寶石を厲王に献上した。しかし、ただの石と鑑定されて、左足を切られてしまった。のち武王の代になり再び献じたが、またもや石とされて右足も切られてしまった。文王の時になって、原石を抱いて泣き続ける和氏のことを伝え聞いた王は、その石を磨かせると、果たして名玉であった。この玉はのち趙国に伝えられ、『後漢書』劉陶伝や、『史記』廉頗藺相如列伝の璧の故事「完璧」の起源として伝わっていくが、こうした宝玉は、すべて崑崙山脈の北麓のホータン産である。その東伝の古いルートは、和田↓浦洛↓民豊↓末且↓若羌↓索爾庫里↓甘森↓格爾木↓小南川↓安多↓拉薩↓皮若↓林芝↓通麥↓然烏↓怒江↓昌都↓徳格↓玉隆↓新都橋↓雅安↓成都であり、その後、長江上流から船で三峡を下り、楚国へと伝えられたと推察

される。

こうした西南シルクロードの交易は、玉石などの文物だけでなく、崑崙山脈にまつわる伝説や神話なども、長江の中、下流にもたらした。中国における叙事詩の『楚辞』では、崑崙山までの険しい道は、曲がりくねり長々と山谷をめぐっていると歌っている。

遭吾道夫崑崙兮、路脩遠以周流。揚雲霓之晻藹兮、鳴玉鸞之啾啾。

（屈原『楚辞』離騷）

漢代に入ると漢民族の勢力は大きく西方に進出し、とくに景帝の第九子であった武帝は、前一四〇年、一六歳で即位し「賢良、方正、直言、極諫」の士を多く登用した。さらに、前一二五年、文教政策にも力を入れ「太学たいがく」を設け、儒学を学ぶように奨励した。

匈奴対策については、開戦するか、今までどおり贈り物を送って屈辱的な和親を続けるか、何度も群臣たちに討議させた。武帝の偉大さは、直観的な独断でなく、衆議を尽くしたところにある。武帝は、家臣たちに意見を戦わせることにより、国家の重要な案件の推移を皆で共有でき、より良き政策を打ち出せると思ったからである。

折りしも、衛青えいせいと霍去病かくきょへいという若き人材を見出した武帝は、前一二七年と前一二一年の二回にわたって二人を遠征させ、武威、張掖、酒泉、敦煌の河西四郡を置き、本格的に西域開拓に乗り出した。その結果、匈奴を遠く漠北の地に退かせ、シルクロードを通して西方の国々と通商の道を始め、烏孫からは天馬数十頭を、また前一〇一年には貳師將軍の李広利を大宛国に送り、多数の汗血馬を持ち帰らせた。『全漢詩』巻一には、武帝が名馬を手に入れた喜びの歌「西極天馬歌」が、また、『古詩源』巻一にも同じ作品が収録されている。

天馬徠兮從西極、經万里兮帰有徳、承靈威兮降外国、涉流沙兮四夷服。

匈奴との戦いは勝敗のつかないまま、永い歳月にわたって幾度か激戦が繰り広げられた。しかし、漢は匈奴以外の西域諸国とは、できる限り友好関係を結ぼうとした。前一〇五年、皇族である江都王劉建の女の細君は、和親という名のもと、遠く天山山脈の北麓の新疆伊犁河の流域を支配していた烏孫王のもとに嫁せられた。漢土とは言語も風俗も生活も異なり、その悲しみを詠った細君の詩「烏孫公主歌」が『古詩源』巻一に伝わっている。

吾家嫁我兮天一方、遠託異国兮烏孫王……中略……居常土思兮心内傷、願為黄鵠兮帰故郷。

前九九年、漢軍は五方面に分かれて匈奴に向かって進軍した。この匈奴との戦いの中、歴史に名をとどめる一人の將軍がいた。隴西成紀ろうせいせいぎの人で、騎射を善くした飛將軍李陵である。李陵は五千の兵をもって善戦したが、敵は五万人、やがて矢つき刀折れ、やむを得ず匈奴に降くだった。こうした塞外民族との度重なる戦争という歴史的な事実を、史書は詳細に後世に伝えている。

長安の都では、李陵が降伏し、匈奴軍に兵法を教えているとの嫌疑により、武帝は李陵の母、弟、妻、子等みな殺し、弁護した司馬遷を宮刑に処してしまった。あとになって匈奴王に兵法を教えたのは、李緒なる人物であったことが判明する。しかし、帰る場を失った李陵は、やむを得ず匈奴王に仕え右賢王となる。

昭帝の時、漢と匈奴の和親が成り、一緒に抑留されていた蘇武が長安に帰国することになった。二人は置酒して対話し、悲歌を作ったという。作者については異説はあるが、『古詩源』・『文選』には蘇武の詩四首、また、李陵の作「与蘇武詩」三首、及び「別歌」がある。その一節を引用してみよう。

経万里兮度沙漠、為君將兮奮匈奴、路窮絶兮矢刃摧、士衆滅兮名已隕、老母已死、雖欲報恩將安歸。

一九四〇年夏、キルギスの阿巴干城の南八キロのところ、四五×三五メートル、漢の長安城を小さくした形の宮殿遺址が発見された。そこから漢代の文物が数多く出土し、李陵の住んだ都城^③ではないかと推測されていた。しかし、この城址は近年の研究では、李陵が死去（前七四）してから約百年後の造営であることが瓦の銘辞によって判明し、この論争に一応の終止符が打たれた。なぜ、「一応」と述べたかといえば、西域の建造物は石窟寺院の「重修」と記された年代を見るに、ほぼ百年たつと修築されている。この瓦も、李陵が住んでいた日干しレンガで造営した宮殿が古くなったので、改めてもう一度修築された時の瓦かもしれない。故に「一応」と記したのである。

第三章 六朝から唐代にかけて「楼蘭」を詠んだ作品

中国の六朝時代^{りちちゆう}、宋・齊・梁の三朝に仕えた文人がいる。浙江省武康県の人、沈約（四四一〜五一二）である。彼は中国詩上、楼蘭という地名を用いた最も早い作品「白馬篇」を残している。この作品を詠んだ時には、楼蘭はまだ滅亡したばかりであった。

楼蘭が滅亡したのは、西暦四九二年、丁零（高車）⁽⁴⁾の攻撃を受け住民は四散してしまった。もちろんそれ以前に滅亡の兆しはあった。四四二年、沮渠安周の侵入を受け、国王の比龍は楼蘭王国の人口半分を率いて、西域南道のオアシス且末に亡命してしまった。さらに、四四五年、北魏の攻撃を受けた楼蘭国王の真達は降伏し、独立国家の体制は崩壊、単なる流沙の中の一オアシスとなっていた。そのような小さな町にも、四五二年には吐谷渾、四六〇年には柔然の攻撃があり、七〇〇余の住民は逃げ惑うばかりであった。

沈約の死は五一二年であるので、楼蘭は、その一九年前に滅亡している。沈約はすでに王国の滅亡を伝え聞いているものと思われるが、ここでは英雄的な意気込みで、遠征して楼蘭城に入った時の感懐を空想として表現している作品を紹介、その他、楼蘭を詠んだ同時期の詩篇を七首あげる。

長驅入右地、輕拳入楼蘭

(沈約・白馬篇)

甘泉警烽候、上谷抵楼蘭

(徐悱・古意酬致長史漑登琅邪城詩)

占兵出細柳、轉戰向楼蘭

(徐悱・白馬篇)

頓取楼蘭頸、就解郅支裘

(劉孝威・隴頭水)

驄馬出楼蘭、一步九盤桓

(劉孝威・和王竟陵愛妾換馬)

貳師惜善馬、楼蘭貪漢財

(蕭綱・從軍行)

呼韓北款、楼蘭南催

(蕭綱・和贈逸民應詔詩其六)

次いで、度信（五二二～五八〇）は河南省の出身で、当時の文壇の大御所であった。その詩才は同時代の文人をはる

かに凌駕していた。

都護樓蘭返、將軍疏勒帰

(庾信・擬詠懷詩)

庾信の生存したこの時期、樓蘭道はもう使用されておらず、疏勒(カシユガル)には、敦煌より哈密を経て金滿城へ、そして龜茲を経て尉頭国を通って行くしかない。もう一本の道は陽関より米蘭へ、そして于闐から莎車を経て疏勒に通ずる道である。故にこの詩を正確に、史書のような記述として読めば、前半は王国はもう存在しないのだから虚構であり、後半は真実(事実)のようであるが、庾信の生きていた梁から陳の時代、遠く疏勒まで將軍が遠征することはなかった。故にここでは、あくまでも文学的イメージとしての樓蘭であり、疏勒の詠出であるといつてよい。なお、この詩句の根底は、望郷の念を駆り立てる詩情ではなく、戦争での活躍を望む思いが込められている。

庾信はこの「擬詠懷詩」の中で「李陵 此れ従り去り、荊卿 復た還らず」とか、「遊子河梁の上、応に蘇武と別るるなるべし」と詠み、あたかも史書をひもとくがごとく詠史的に歌っているのが特徴といえる。

隋代に入ると師均衡(五四〇～六〇九)の詩中に、「樓蘭」が見える。師均衡は山西省榮河県の人で、北齊・北周に仕えた。隋の文帝の時、内史侍郎、上開府となったが、煬帝に嫌われ殺された。その作品「出塞」は、傅介子の故事をふまえ、遊侠的壮士の姿を描くかのごとく、勇戦詩として歌われている。

還嗤傅介子、辛苦刺樓蘭

(師均衡・出塞)

傅介子については、『前漢書』傅介子伝に、漢の使者が西域諸国に向かう途中、樓蘭の親匈奴よりの国王安婦によ

り、たびたび苦しめられた。そのため皇帝は前七七年、傅介子を派遣し奸計を用いて楼蘭王を殺害させた。その後、漢に降っていた弟の尉屠耆を新しい王に任命した。漢帝からの贈り物をわたすと偽って、楼蘭王を少ない人数で殺した傅介子は、その功により義陽侯に封ぜられ、青史に名を連ねることとなった。また、王を後ろから刺した部下は、皆侍郎に昇進し文学素材となつて歌われている。

思えば、二九〇〇人余もいる楼蘭兵のまつただ中、わずかの兵で大きな成果を上げたこの勇氣ある行動は、中原の人々に美談として語り伝えられていった。漢代に形成の萌芽をもつ中華思想は、その主流の一つである漢民族優越の考えとともに、文学的には漢の武帝朝に国民に浸透し、六朝時代にほぼ外形が成り、唐朝に於いて成熟したといつてよい。

言うまでもなく、中国の漢民族を中心とした歴代王朝は、たえず塞外異民族の侵入に悩まされてきた。そうした中であつて傅介子の一陣の爽風の如き活躍は、漢民族の心いつまでも生き続けるのであつた。

後漢の班超の場合は、三二人でカシユガルに遠征し西域に平和を保つたが、あまりにも少数民族に支持されすぎ、漢族の立場から見れば、漢民族の主体性が薄らぎ、現地に埋没したように感じられる。それに対して傅介子は、頭脳と武力を使つての智勇兼備の行動として、時代と空間を超えて文学の世界、なかならず漢詩の分野に表出してくる。

次に詩人たちは、この斬殺事件をどのように歌いあげているのかについて見ていく。劉孝威（四六九～五四九）は「頓に楼蘭の頸を取る」（隴頭水）と歌つたが、唐代では王の首を切り落とした故事をふまえ、「楼蘭」と「斬」を詩中において接続して使用している。

原将腰下劍、直為斬楼蘭

（李白・塞下曲）

揮刃斬楼蘭、弯弓射賢王
(李白・出自薊北門行)

盧館須征日、楼蘭要斬時
(杜甫・暮冬送蘇四郎系兵曹)

楼蘭斬未還、烟塵一長望
(杜甫・秦州雜詩)

分明会得將軍意、不斬楼蘭不擬回
(曹唐・送康祭酒赴輪台)

横行俱是封侯者、誰斬楼蘭獻未央
(翁綬・隴頭吟)

前年斬楼蘭、去歲平月支
(翁綬・北庭西郊侯封大夫受降回軍獻上)

李白の詩は、「直ちに」とか「刃を揮って」とあるように、英雄的であり決断力に満ちた作品であり、一種の男気に満ちた勇戦督戦詩といえる。曹唐の詩には、上意下達の意を受け、強者が弱者を成敗するという傲慢さが垣間見られる。翁綬の作品の「封侯」は、まさしく傅介子が義陽侯に封じられたことを意識して作詩されたもので、漢の未央宮に思いを馳せての詩である。また、対句の形式で詠まれた「楼蘭」と「月氏」は、文学としては成立し得るが、すでに時間的には、月支（月氏）は祁連山脈を匈奴に追われた民族である。傅介子の壮挙は、その約二〇〇年後のことなのである。そうした時間的差異をのりこえ、「楼蘭」と「月氏」を並列的に使用して歌っていることに注目したい。祁連山脈の西端には、月氏が都した美しい敦煌のイメージがあり、小川恒男氏も論述しているように、地名を引

用したその彼方には、人間の熱い血潮と重層的な歴史が脈動しているのである。

次に、「刺」を用いて楼蘭を歌った作品、ここでは唐代の張九齡（六七八～七四〇）の「送趙都護赴安西」の一節を引く。

自然来月窟、何用刺楼蘭

まことに悠然とした詩風で、「大唐の春」の高雅さを漂わせている。この他、楼蘭を屈服させ支配しようとの意思を示した詩篇を紹介しよう。

双双掉鞭行、游措向楼蘭

（李白・幽州胡馬客歌）

冀馬楼蘭将、燕犀上谷兵

（虞世南・從軍行）

都護在楼蘭、輕騎猶銜勒

（虞世南・擬飲馬長城窟）

楼蘭首復伝、龍城含暎霧

（虞羽客・結客少年場行）

漢家征戍客、年歲在楼蘭

（鄭愔・塞外）

軍驅大宛馬、擊取樓蘭王（岑參・武威送劉單判官赴安西行營便呈高開府）

黃沙百戰穿金甲、不破樓蘭終不還（王昌齡・從軍行）

明敕星馳封寶劍、辭君一夜取樓蘭（王昌齡・從軍行）

十五役辺地、三回討樓蘭（王昌齡・代扶風主人答）

馬蹄經月窟、劍術指樓蘭（高適・東平留贈狄司馬）

猶道樓蘭十萬師、書生匹馬去何之（嚴維・送房元直赴北京）

樓蘭經百戰、更道戍龍城（武衡・石州城）

功名耻計擒生數、直折樓蘭報國恩（張仲素・塞下曲）

擬膾樓蘭肉、蓄怒時未揚（孟郊・猛將吟）

これら唐代の詩篇一四篇を見るに、「樓蘭の首」とか、「樓蘭を討つ」といった詩句からは、勇壮かつ好戦的な姿勢

が見られる。いずれも楼蘭王国は存在しないことを知悉しつつ、その名のみを借り、詩人としての決意や、遠征する兵士の心中を想察しての作である。王昌齡の如く感情を高揚させ「一夜にして楼蘭を取る」（従軍行）と、動的に詠いあげた作品もある。

なお、六朝詩にも「驄馬 楼蘭を出ず」（劉孝感）など、「馬」と結び付けて「楼蘭」を詠んでいるが、唐代の詩篇でも楼蘭という地名を用いた詩句中、「馬」という漢字、もしくは馬を想定させる詩語を用いた作品は六篇ある。そうした中、漢代に思いを馳せ、回想的に「漢家征戌の客、年歳楼蘭に在り」と歌う詩人もいて、「楼蘭」への回帰は重層的になっているのが特徴である。

次に、唐詩において「楼蘭」という文字を読み込んでいるが、楼蘭を攻撃するのでもなければ、国王を斬るわけでもない。辺境の風景を描き、叙情的に西方へのノスタルジアを現出させる機能として、楼蘭を取り上げた作品を紹介しよう。ここでは、荒涼とした流沙の地は想察できるものの、功名や気概とは離れた穏やかな詩風が垣間見られ、淡い旅情にも似た虚構に支えられていることに気づくのである。

官軍西出過楼蘭、营幕傍臨月窟寒

（岑参・献封大夫破播仙凯歌六章其二）

始返楼蘭国、還向朔方城

（陳子昂・和陸明府贈將軍重処寒）

吹之一曲猶未了、愁殺楼蘭征戌兒

（岑参・胡笳歌送顔真卿使赴河隴）

月下丁冬擣寒玉、楼蘭欲寄在何郷

（韋莊・擣練篇）

以上、唐代の主たる作品に詠われた「楼蘭」を引用してきたが、文学的には大きく分類して次の二つの系譜になる。

一、傅介子の歴史的故事を念頭におき、中華思想を精神的基盤として、漢族は楼蘭を支配すべき対象の国として回顧して歌った作品群。ここでは、「楼蘭」は、「斬」とか「刺」という言葉と連結して歌われている。

二、「楼蘭」が、郷愁の対象としての詩語となつて詠出されている詩作品もある。楼蘭というまろやかな発音は、西域の代名詞として大いに長安の文人の詩情をかき立てたのである。とくに、唐代は西域への支配地域が、ウズベキスタンやキルギス、それにタジキスタンやカザフスタンにまで及び、詩人たちは異国での風物に驚嘆した、その風光や人情を叙情的に歌うのであった。

第四章 宋代の詩歌に見られる「楼蘭」の文学的位置

宋代は「武」よりも「文」に重きを置いたこともあり、西域や北方からの異民族の侵入にたえず悩まされてきたといえる。それ故に詩人たちは、憂国の情や経世的壮士につき動かされ、戦闘的な辺塞詩を多く作った。おだやかな異国情緒を基盤とした「楼蘭」のとらえ方は少なく、傅介子の故事を引き継いで「楼蘭」を、「斬る」といった詩語と結びつけて詠むことが多い。中には、劉過のように、楼蘭を切らなければ「心平らかならず」とまで歌っている詩人もいる。彼らの作品からは、異民族の侵入による怒りもさることながら、中華思想に裏付けられた漢族対少数民族といった根深い対立と、憤怒の情の淵源を見る思いがする。

要斬楼蘭三尺劍、遺恨琵琶旧語

(張元干・賀新郎)

擒頡利斬楼蘭、混一車書道
(曹冠・鳶山溪)

未用漢軍頻出塞、從生事、斬楼蘭。
(王庭珪・江城子)

月挂空齋作琴伴、未須携去斬楼蘭。
(辛弃疾・送劍与傅岩叟)

男兒斬却楼蘭首、閑品茶經拜羽仙。
(文天祥・太白樓)

斬楼蘭擒頡利、志須酬。
(劉過・水詞歌頭)

不斬楼蘭心不平、歸來晚听随軍鼓吟
(劉過・池園春)

劍未斬楼蘭、莫空還
(卓田・昭君怨)

これらの作品を見るに、宋代の詩風の特徴がよく出ている。それは、唐代のように雄大な男性的で力強い詩風ばかりではなく、日常的な文物にも細かく目を向けて観照するという視点である。「琵琶」、「書道」、「琴」、「茶經」といった、およそ楼蘭と戦いを交える詩では、想像もつかない語句を使用しているところに、宋代の詩の傾向性がにじみ出ているといえよう。

この他にも宋詩の中には、楼蘭を詩句に取り入れた作品が多く、中には楼蘭人の左耳を多人切り落として、手柄を

数えたいと詠む作品もあれば、剣をたずさえて楼蘭に向かい、手柄をたてて功名をあげたい歌う詩もある。

楼蘭飛馱、焉耆授首
(吳潛・賀聖明)

楼蘭勦業意悠悠、聊作人間汗漫游
(陸游・野興)

束起楼蘭劍、歸釣子陵台
(李曾伯・水調歌頭)

手袖伊吾長劍、馳志在楼蘭
(李曾伯・水調歌頭)

第五章 楼蘭文学の特質について

西域のオアシス「楼蘭」が詩中に読まれたのは、六朝時代からであるが、本格的に詩語としての地位を確立したのは、唐朝辺塞詩の成立と期を同じくする。六朝から唐代の詩篇にあって、「楼蘭」というオアシス国家が詩中にどのような詠まれているかを具体的作品を提示しつつ若干の考察を加えた。詩集をひもといて気づいたことであるが、一番多い西域の地名は、敦煌地域の陽関と玉門関であった。たとえば、「春光度らず 玉門関」(王之涣・登鸛鵲樓)、「西のかた陽関を出ずれば故人無からん」(王維・送元二使安西)、「総て是れ玉関の情」(李白・子夜呉歌)等である。

次に多いのが吐魯番の「交河」で、「黄昏に飲馬す交河の傍」(李頎・古從軍行)、「交河は絶塞に浮く」(駱賓王・晚度天山有懷京邑)、「冰は塞ぐ交河の源」(虞世基・出塞)、「交河の冰は已に結ぶ」(李世民・飲馬長城窟行)、「交河城辺鳥飛ぶこと絶ゆ」(岑參・天山雪歌送蕭治歸京)等となっている。その他、輪台、尉犁、疏勒、西涼、龜茲、酒泉、涼州、

哈密、大宛、北庭、条支、安西、車師、碎葉、高昌といった町が詠まれ、天山、蒲海、祁連、崑崙、熱海、葱河といった山や川や湖も随所に詠い込まれている。

その他、シルクロードを代表する詩語として、胡天、駱駝、征戍、胡笳、出塞、入塞、胡雁、絶域、胡琴、塞砂、单于、胡騎、紅柳、胡風、鉄関、蒲昌、火山、胡兒、蕃軍、平沙、戍楼、黄沙、胡瓶、塞馬、塞沙、都尉、都護、絶漠、羌笛、瀚海、楊柳、琵琶、西戍、沙場、青海、胡虜、烏孫、葡萄酒、月氏、匈奴、商胡、胡旋、西域、胡天、赤亭、戍王、蕃騎、塞下、塞外、大漠、戍鼓、穹廬、葡萄、辺庭などがあつた。

そうした中であつて多くの町や川や山は、時の推移変転とともに消えていったが、「楼蘭」だけは、時代や空間を超えて歌い継がれている。その理由は、歴史的には四千年の星霜を有し、文化的には東西文化の架橋の役目を果たし、さらに仏教や宝玉の東伝に大きな役割を担った王国だったからである。そして、なによりも漢民族の優越思想を刺激し、心地よいロマンを胸中に惹起させるにふさわしい漢土と西域をつなぐ王国であつたので、栄達と郷愁の念を涌现し、交叉させつつ詩人たちに継承されていったのである。

思えば、中国の長い歴史にあつて、一度たりとも楼蘭が中国に攻め来つたことはない。それなのに、徐悱は「上谷に楼蘭を抵ぐ」（古意酬致長史漑登琅邪城詩）と歌っている。「上谷」は『史記』匈奴列伝によれば「上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡を置きて、以て胡を拒ぐ」とあるように、実際の楼蘭からは四〇〇〇キロ以上離れた河北省北部にある。攻撃はまったく不可能なのに、ただ、いにしえに対する憧憬という文学的叙情性のみを考えて、西域の代名詞として、「楼蘭」を配しているのである。

それに対して中国は、漢代より六百年の長きにわたつて、たびたび楼蘭に侵攻し、国王を斬殺し、住民を苦しめていた。そして、楼蘭が滅亡したあとも、今度は詩篇に於いて攻撃し、侵略し、殺戮している。中華思想から見れば、あくまでも楼蘭は西戍、胡虜の地なのであり、国威の発揚における攻め滅ぼすべき対象なのであつた。故に、前一一

○年、七〇〇余の輕騎兵で楼蘭を侵略した趙破奴ちゆうはくなんや、前七七年に楼蘭王を殺した傅介子は、まぎれもなく漢族の英雄であり、後世に語り伝えるべき人物であったといえよう。

ところで、漢民族は好戦的とばかり言えず、古来、反戦平和の文学の流れが存在したことを述べねばなるまい。出征兵士が家族を思うさまを歌った詩は、春秋時代から数多く存在している。「父は曰はん嗟あは予が子よ、行役こうやくして夙夜しゆや已むこと無けん」〔詩経〕魏風、「白骨人の収むる無し」〔古詩源〕企喻歌などがある。唐代には無能な為政者に対して怒りを込めて「鬪いくさ骸は尽く是れ長城の卒、日暮沙場に飛びて灰と作る」(常建)、「白骨の縦横 乱麻らんまに似たり、幾年か桑梓そうし龍沙に変ぜし」(元好問)、「或は十五従り北のかた河を防ぎ、便ち四〇に至るも西の方田かたでんを営む」(杜甫)、「黄昏こうこん塞北に人煙無く、鬼哭きこく啾啾しゅうしゅうとして声天こゑに沸く」(王翰)と、こうした辺境の悲惨さを写す詩篇を見ると、中国古典詩には勇戦督戦詩と、厭戦反戦詩の系譜のあることが分かる。そうした中であつて「楼蘭」を歌詩に入れることは、前者、すなわち、英雄としての経世的壮士の脈動と、英雄的壮志と男のロマンとしての生きがいとが、深く連結している文学思潮といえる。

注

- (1) コーカソイド系の民族が、紀元前二〇〇〇年頃から、楼蘭、哈密、奇台一帯に住み着いていたことが、一九一三年から一九一五年にかけての、イギリスのスタイン隊によつて発掘された、五ツの頭骨の調査分析によつて判明している。詳しくは「楼蘭一千年の伝奇と先年の謎」穆舜英・梁越著。外文出版社、二〇〇五年一月刊。その中の五七ページ「印欧人種」参照のこと。
- (2) 「史記」匈奴列伝に「天の福、吏卒の良、馬の強力を以てし、以て月氏を夷滅し、尽く之を斬殺降下し、楼蘭、烏孫、呼揭及び其旁二十六国を定め、皆以て匈奴と為せり」とある。
- (3) キルギスの阿巴干城(アバカン市)の郊外で出土した軒丸瓦については、「天子千秋萬歳常樂未央」との刻字があつた。「常

樂は『漢書』王莽伝にあるように、王莽が改名したのであって、漢が復興するとすぐに「長樂」にもどされている。近年、この宮殿は李陵が住んだ建物ではないかという説があった。詳しくは『スキタイと匈奴遊牧の文明』講談社、林俊雄著、二〇〇七年六月刊。第八章、三〇六から三〇八ページ参照のこと。なお、『辺塞詩風西域魂』薛宗正。新疆青少年出版社、二〇〇三年三月刊。第二章「漢開西域壯士歌」、一四から一五ページにも、李陵の住居についての記述がある。

私は、この時期に李陵以外の漢將で、匈奴に投降し、漢宮に擬した宮殿を造営できる人物は見あたらないことから、李陵の住んだ建物を、後世、重修したものと考えている。軒丸瓦は改修時に使用されたものと推断したい。

(4) 楼蘭では、魏晉時代に入ると、僧侶の異常な増加と、その腐敗と墮落が見られるようになった。とくに晋代には、人口一七一一〇〇人中、出家者が四〇〇〇〇余人もいた。僧侶は権威をもって純朴な住民から布施、供養を取り続けた。またこの時期、魏晉時代から寒冷化という気候変動に入り、タリム河の支流である孔雀川の水が、ロプ・ノールに注ぎ込まなくなり、水不足となった。それにより、塩害をおこし小ムギ等の収穫量が減少、食糧不足におちいった。それなのに、王国の未来に思いを馳せる住民が少なく、自分たちさえ良ければよいという利己主義者が多くなり、二毛作を始めて土壌を傷め、さらに羊やヤギを放牧し、草を根こそぎ食べさせ国土を荒廃させた。

そうした中、貴重な樹木である胡楊を、棺桶を作るために次から次に伐採している。楼蘭西方の墓地では、数体の遺体を埋葬するため、一五〇本余の胡楊を伐採していた。こうした樹木の伐採は、楼蘭地域の環境破壊をおこし、王国の滅亡を加速させた。なお、漢土では「太学」を設けるなど、積極的に青年に対して教育を施していたが、楼蘭王国では教育が欠如し、優れた人材を輩出できなかった。指導者の不足は、対外政策の失敗を招き、幾度も他国の攻撃を受けるなど、人的、経済的損失を重ね王国を衰微させるのであった。

(5) 『前漢書』傅介子伝に「訳に謂わしめて曰く、漢の使者黄金錦繡を持し、行くゆく諸国に賜う。王来り受けずんば我去つて西国に之かん」と。即ち金幣を出して以て訳に示す。訳還つて王に報ず。王、漢物を貪り、来つて使者を見る。介子、ともに坐して飲み、物を陳ねて之に示す。酒を飲んで皆酔う。介子、王に謂つて曰く、天子我をして私に王を報ぜしむ。王起ちて介子に随つて帳中に入り、屏語す。壮士二人、後より之を刺す。刃胸に交わり、立ちどころに死す。其の貴人左右皆散じ走る。介子告諭す、王が漢に負く罪を以て、天子我を遣して来つて王を誅せしむ。当に更めて、前に太子質して漢に在る者を立つべし。漢兵方に至らん、敢て動くこと勿れ。動けば国を滅ぼさんと。遂に王の首を持ちて還りて闕に詣る。公卿將軍の議する者、咸其の功を嘉す」とある。

(6)

小川恒男氏は「六朝詩に見える『樓蘭』——樂府『白馬篇』を中心に——」広島大学『中国中世文学研究』五二号、二〇〇七年九月刊において、「それぞれの地名はそれぞれ独自の歴史的背景を持つ。そのため、地名が詩に用いられることばとなって立ち現れる時、その土地を舞台に繰り広げられた過去の様々な出来事がことばの背後にある種のイメージとなって存在するようになる」と述べている。

(やまだ かつひさ・委嘱研究員)



鬼哭啾啾たる楼蘭郊外の砂漠は、人間の近づくことを拒み、あたかも地獄の様相を呈していた。
(筆者撮影)



楼蘭故城内の仏塔は高さ12メートル余、1700年の歳月を経ても今なお、孤影悄然と虚空に聳えていた。
(筆者撮影)



トルファンから楼蘭故城までの道程には、道も人家も無く、私たちは5日間にわたって野営することとなった。
(筆者撮影)

天山山脈から吹きすさぶ強風によって浸蝕された楼蘭北東にある龍城の奇岩。
(筆者撮影)



楼蘭への流沙の道は侵入者を拒み、
私たちが乗った四輪駆動
車も砂に埋まってしまった。
(筆者撮影)



Literatures of Loulan: A Study of Loulan Composed in Chinese Classical Poetry

Katsuhisa Yamada

Loulan, the name of Western kingdom, appeared since the latter of the sixth century in Chinese classical poetry.

Although Loulan had been overthrown in 492.A.D., the poets who flourished after the downfall ,especially from Sui dynasty to Sung dynasty, depicted the down fallen kingdom.

When we analyze these poems, it seems that Loulan hasn't fallen yet because the poets depicted it as objects of antagonism.

What I examine here is why the ancient Chinese poets depicted Loulan with “斬” , “刺” , and so on and how portraits of Loulan had been changing as time went by through some concrete examples.